

1 国語科における「問いをもち、主体的に追求する姿」

子どもたちは、この学校園で過ごす 11 年間の間に、非常に多くの言葉を手に入れ、それらを使って自分に必要な情報を得たり、自分の伝えたいことを相手に伝えたりするようになる。幼稚園で、遊びの中から多くの言葉を獲得した子どもたちは、小学校に入学すると授業の中でそれを用いながら、さらに多くを獲得していく。身に付けた言葉を使って周りの人々に表す思いや考えも、発達段階に応じてだんだんと複雑なものになっていく。言葉は子どもたちにとって、とても重要なコミュニケーションの手段であり、一方で、自分の思いを形にしていくという思考のための手段でもあると言える。

子どもたちが今後、一人の社会人として生きていくためには、豊かな言葉を身に付け、物事を自分でとらえ、自分で追求し、自分で決定できることが必要不可欠となる。そのためには、言葉を単なる知識や技術として獲得するだけでなく、自分の思考をより広げ、深めることや、思考したことを目的や相手に応じて適切に表出していくことのできる主体的な言葉の使い手になることが望まれる。

本学校園国語科では、研究主題「学び続ける子どもの育成」を受け、昨年度は「話すこと・聞くこと」を学習の中心に据えて実践に取り組んできた。何を伝えたいかという「目的意識」に加え、相手のことを考えて自分の言動を決めていく「相手意識」が、より深い「問い」を生み、その経験を繰り返すことが言葉の力の高まりにつながると考えての実践であった。その中で、伝わる経験だけではなく、伝わらない経験にも価値を見だし、考えさせることが、最終的には、言葉を通して学び続ける子どもを育成することにつながるという示唆を得ることができた。また、子どもが問いをもち主体的に追求していくためには、学習材や考え方などの学習の対象とどう出会わせるかも非常に大切になってくるということが見えてきた。

そこで、今年度は「話すこと・聞くこと」の領域に限定せずに研究を進めることとし、問いをもち主体的に追求する姿を、次のように設定した。

- ・学習の対象との出会いを通して今後の学習に見通しをもち、自分の思考を深めようとする姿
- ・他者との関わりの中で自分の思考を見つめ直し、言葉や思考の在り方について吟味する姿
- ・思考の過程を振り返り、よりよい思考や表現を追求しようとする姿

領域を限定しないことで、今年度はより幅広い学習対象との出会いから言葉を用いた思考を深めることができるのではないかと考えている。

さらに、思考したことを他者に対して表現していくことを通して、自分の思考が他者に伝わることの楽しさや、他者の思考について知ることが自分の思考をさらに変容させ、磨いていくことを経験させたい。思考の交流を通して「考えが広がった」「考えが変わった」、あるいは「考えたことが自分の力になった」などの思いをもったとき、子どもたちは自己の思考や価値観の高まり、すなわち、言葉を通じて思考する価値を実感すると考える。こうした思考する価

値の自覚を、主体的な学びへの意欲の喚起、さらには言葉の力の高まりへとつなげていきたい。

2 問いをもち、主体的に追求する姿を求めて

- 思考の必要性を実感できる単元構成
（「単元を貫く問い」の設定、学習材、思考の指針、目的や相手など）
- 様々な学習形態（ペア、トリオ、グループ等）
- 思考の重点の共通言語化
- 思考の深まりを促すふりかえりの工夫

「単元を貫く言語活動」の重要性が叫ばれているが、学習の対象とどう出会わせるかを研究の重点に据えるという意味からも、言語活動の設定だけにとどまらず、教師が単元構成そのものを工夫していくことが求められる。その際重要になると考えたのが、「単元を貫く問い」である。子どもが言葉の高まりへとつながる問いをもち続け、主体的な追求を展開するためには、思考したい、思考しなければならない、という必然性を、子ども自身が実感している状態にあることが不可欠である。単元全体を貫く問いを設定することで、単元の到達地点を自覚し、見通しをもった追求が可能になるのではないかと考えている。他にも、思考の必要性を実感できるような学習材との出会わせ方、学習活動の組み立て方、目的意識や相手意識を促す場面の設定、必要に応じた思考の指針や方向性の提示など、さまざまな手立てを講じていきたい。

学習形態の工夫は、以前から重視してきた手立てである。学習形態は、個人、ペア、トリオ、グループ、学級全体などさまざまなものがある。今年度はこれまでの成果を踏まえながら、発達段階や学級の状態のみならず、学習活動に応じた適切な形態を選択することで、より主体的な学びを促していきたい。特に、ペアなど複数での学習形態は、周囲の子どもたちの思考に直接触れる機会であり、自分の思考を見つめ直し、問い直す場面として重視していきたい。

共通言語化も、以前から重視してきたはたらきかけの一つである。例えば、「読むこと」領域において、子どもが自己の読みを他者に伝える際には、個々が習得している語彙で書いたり、語ったりすることになる。表現された個々の言葉を、教師が共通の言語を用いて整理し、読みを共有できるようにするはたらきかけが共通言語化である。今年度は、個々の思考が表現されていく過程で必要に応じて共通言語化を図ることを意識していく。これによって、子どもたちが自分の思考を整理しやすくするとともに、互いの思考を同じ言葉で共有することで、思考の深まりを促せるのではないかと考える。

ふりかえりについては、従来は毎時間の授業内容について、あるいは単元全体について、子ども自身が疑問点や感想などを個々に文字化してまとめ、再確認をするという形が多かった。しかし、ともすると型にはまった画一的なものになりやすい面もあったため、今年度は、思考の深まりを促すという意味から、ふりかえりの在り方も問い直していきたい。具体的にはまず、振り返るポイントを明確に示すことで、その時点の自己の思考について子どもが真摯に見つめ直し、個々の思考を深める契機としていきたい。また、授業の導入時にあらかじめポイントを示したり、授業の最後に授業内容を踏まえて示したりなど、ポイントの提示の仕方も工夫していきたい。他にも、ふりかえりの内容を子どもたちにフィードバックすることで新たな授業を展開していくなど、単元構成上の工夫にもつなげる形をとることで、授業自体をさらに思考の深まりを促すものにしていくようなふりかえりの活用の仕方についても検討していきたい。

（ 文責 籠橋 剛 ）